



神隠し



川崎ゆきお

牛島はやることがないので、道路脇で崩れたブロック塀に腰掛けた。まだ老人と呼べる年齢ではない。

ブロック塀の上に金網の柵が乗っていたのだろうが、そこだけが壊れていた。

柵の中は駐車場になっている。

牛島は座れそうな場所ならどこでもよかった。

家から少し離れている。近すぎると顔見知りに出くわすからだ。ここなら見知らぬ人が通り過ぎるので、それを見ているだけでも退屈しないだろうと思った。

梅雨の晴れ間に湿った体を乾かしたいという理由もある。

小一時間ほど経過した。

通り過ぎる自転車や自動車、そして通行人を見ているだけでも間が持った。

みんな何かをしている。用事で移動しているのだ。

渋滞で車が止ってしまふことがある。そういうとき車内を見ると、やっと運転手の顔やその表情が分かる。走っているときには車そのものの表情だけしか印象に残らないが、こうして眺めていると、人柄や生活まで伝わってくる。

牛島は、本当にやるようなことはもうない。自分で何か用事でも作ればいいのだが、もう社会は牛島の力を求めている。

特に力持ちではないが、土木作業員独自の筋肉のつきかたをしている。

腰を痛めてから、もう現場には出ていない。

今は、そういうことも考えなくなり、何もしないで暮らしている。

さすがにブロック塀の腰掛けでは尻が痛くなってきたのか、牛島は立ち上がった。

そこに座ってじっとしていることに飽きたわけではない。

そして別の場所で座り直そうと歩きだした。

「牛やん」

トラックの運転手が声をかけた。

いっしょに働いていた仲間の服部だった。

「暇あったら来てや、突貫工事やねん」

牛島はちょっと嬉しい気持ちになった。まだ自分を必要としている人間がいたからだ。

牛島はトラックの助手席に飛び乗った。

そして牛島は消息を絶った。

息子夫婦が捜査願いを出した。見つかったのは三日後で、あの崩れたブロック塀に深夜座っていた。

これを神隠し的一种だとは、誰も言わなかった。

了